

ラーマヌジャの瞑想論(7)

——『シュリー・バーシュヤ』III. 3. 38～43 読解——

木 村 文 輝

キーワード：Rāmānuja、Śrībhāṣya、瞑想

第16節

kāmādītaratra tatra cāyatanādibhyaḥ //38//

他の箇所とその箇所において、「欲望 [が実現すること]」等 [によって限定されたブラフマンこそが、念想されるべき対象であると理解されている]。[念想されるべき対象の] 抛り所等 [の記述が共通である] が故に¹⁾。

〈450〉『チャーンドーギヤ [・ウパニシャッド]』において、[次のように] 説かれている。

「さて、このブラフマンの城郭の中に、この微細な白蓮華なる家がある。この内部に微細な虚空があり、その内部にあるものが、探求されるべきものである。」(Chā. Up. VIII. 1. 1)

から始まる [一節である]。また、ヴァージャサネーヤ派 [の聖典] においては [次のように説かれている]。

「実に、この偉大で不生なるアートマンは、諸器官 (prāna) の中で認識 (vijñāna) からなるこのものである。彼は、この心臓の中の虚空の中に横たわっているものであり、万物の支配者であり、万物の君主である。」(Br. Up. IV. 4. 22)

から始まる [一節である]。

それに関して [次のような] 疑問が [生ずる]。

【問】これら二つ [の記述] の中で、ヴィディヤーには区別があるのか否か。いずれが適切であるのか。

【論者】 区別はある。なぜか。[それぞれのヴィディヤーの] 形態 (rūpa) に区別があるからである。『チャンドーギヤ [・ウパニシャッド]』では、「悪から離れていること (apahatapāpmatva)」等という八つの属性²⁾によって限定された虚空 (ākāśa) が念想されるべき対象であると理解されている。一方、ヴァージャサネーヤ派では、虚空の中に横たわっており、支配者性等³⁾の諸属性によって限定されたものが念想されるべき対象であると理解されている。したがって、[それぞれのヴィディヤーの] 形態に区別があるが故に、[二つの] ヴィディヤーには区別がある。

このように [論者によって] 論じられたのに対して、[次のように] 答える。

【答論】 区別はない。なぜか。[それぞれのヴィディヤーの] 形態に区別がないからである。なぜならば、「他の箇所とその箇所において、「欲望 [が実現すること]」等」こそが形態だからである。すなわち、ヴァージャサネーヤ派と『チャンドーギヤ [・ウパニシャッド]』において、「欲望が実現すること (satyakāmatva)」等 [の諸属性] によって限定されたブラフマンこそが、念想されるべき対象 [であると理解されている] という意味である。なぜ、それが理解されるのか。「拠り所等の故に。」すなわち、[それぞれのヴィディヤーで念想されるべき対象のブラフマンは、いずれも] 心臓を拠り所とすることや、[諸世界の] 架け橋であることや、[諸世界を] 支えるものであること等 [の属性を有しているが] 故に、事実、両方 [の記述] において同一のヴィディヤーのみが理解されるのである。また、ヴァージャサネーヤ派で説かれている支配者性 (vaśitva) 等 [の諸属性] は、『チャンドーギヤ [・ウパニシャッド]』において説かれている八つの属性の中の一つである「意図が実現すること (satyasamkalpatva)」の特別な形 (viśeṣa) に他ならない。故に、[支配者性等の諸属性があるということは、]「意図が実現すること」と一緒に存在している、「欲望が実現すること」から「悪から離れていること」まで [の八つの属性] が存在していることを示している。したがって、[それぞれのヴィディヤーの] 形態に区別はない。

また、[ヴィディヤーと果報との] 結びつき (samyoga) も、

「最高の光明に到達した後に、自らの姿 (rūpa) で顕現する。」(Chā. Up. VIII. 12. 3)

「実に、恐れなきブラフマンになる。」(Br. Up. IV. 4. 25)

というように、[いずれのヴィディヤーにおいても] ブラフマンへの到達を本質としており、[両者の間に] 区別はない。

『チャンドーギヤ [・ウパニシャッド]』において、「虚空 (ākāśa)」という語が最高アートマンを表していることは、

「[心臓の内部にある] 微細なる [虚空は、ブラフマンを示している]。後続 [の記述] の故に。」(BS I. 3. 13)

というこ [のストラ] において決定されている。一方、ヴァージャサネーヤ派においては、虚空の中に横たわっているものに支配者性等 [の諸属性] があることが説かれている。故に、その横たわっているものが最高アートマンである。そうであれば、それ (最高アートマン) の拠り所 (ādhāra) を表している「虚空 (ākāśa)」という語は、

「その中に微細な穴がある。」 (Ma. Nā. Up. XI. 9)

という [記述の中で]、心臓の内部にあり、「穴 (suśira)」という語によって示されている空間を表していることが理解される。したがって、[念想されるべき対象の拠り所を示す語である「虚空」という語が両者において共通している。故に、二つの] ヴィディヤーは同一である。//38//

さて、[以上の見解に対して、不二一元論学派から次のような反論が] あるだろう。

【反論】 ヴァージャサネーヤ派においては、支配者性 (vaśitva) 等とともに、「欲望が実現すること (satyakāmatva)」等 [の諸属性も] 存在することが理解されると [汝によって] 述べられた。[だが] それは適切ではない。支配者性等 [の諸属性] が、かの最高真理 (paramārtha) において存在することは決してあり得ないからである⁴⁾。しかも、[最高真理の立場において] それ (ブラフマンの諸属性) が存在しないことは、

「[ブラフマンは] 意のみによって認められるものである。この中に多様性 (nānā) はまったくない。

この中に多様性の如きを見る者は、死から死へ到達する。

[ブラフマンは] 唯一のものとしてのみ認められるべきものである。それは無限であり、堅固である。」 (Br. Up. IV. 4. 19-20)

と述べられている記述と、

「彼、すなわちこのアートマンは「そうではない、そうではない」[と説かれている]。』 (Br. Up. IV. 4. 22)

という後 [続の記述] において、念想されるべき対象であるブラフマンは特質を持たないもの (nirviśeṣa) であることが理解されることから、認められるのである。したがって、支配者性等 [の諸属性] も、「粗大であること (sthūlatva)」や「微細であること (aṇutva)」⁵⁾ 等と同様に、[最高真理の立場におけるブラフマンに関しては] 否定されるべきであると理解される。それ故にこそ、『チャンドーギヤ [・ウパニシャッド]』においても、「欲望が実現すること」等はブラフマンの最高真理における諸属性であると述べられていない。したがって、このような種類の諸属性は最高真理に属するものではない (apāramārthika) ので、[それらの諸属性は] 解脱を目的とする念想においては除去される。

〈451〉 それに対して [ストラガ] 述べる。

ādarād alopah //39//

「欲望が実現すること」等はブラフマンの諸属性である。そのことは聖典の中で] 熱意をもって [教示されている]。[故に、それらが念想の際に] 排除されることはない⁶⁾。

【答論】「欲望が実現すること」等というこれらの諸属性は、[聖典以外の] 他の認識手段 (pramāṇa) によってはブラフマンの属性であると認識することができない。[これらの所属性が、]

「その内部にあるものが、探求されるべきものである。」(Chā. Up. VIII. 1. 1)

「このアートマンは、悪から離れており、不老であり、不死であり、憂いなく、飢餓なく⁷⁾、渇きなく、欲望を実現しており、意図を実現している。」(Chā. Up. VIII. 1. 5)

「万物の支配者であり、万物の君主である。……彼は万物の自在主である。彼は諸存在の王である。彼は諸存在の守護者である。彼はこれらの諸世界が混淆しないように支える架け橋である。」(Br. Up. IV. 4. 22)

等 [の記述] により、これら二つの天啓聖典や他 [の聖典] において、解脱を目的とする念想において念想されるべき対象であるブラフマンの諸属性であると熱意をもって教示されている。故に、これら [の諸属性] が [念想の際に] 「排除されることはない」。しかし、[それらの諸属性の] 統合 (upasaṃhāra) はまさに為されるべきである。事実、『チャンドーギヤ [・ウパニシャッド]』においては、

「この世において、アートマンとこれらの真実なる欲望 (satyān kāmāṃ) とを悟った上で [この世を] 去る者達は、すべての世界の中で欲するままに行動する。」(Chā. Up. VIII. 1. 6)

という [記述によって]、「欲望が実現すること」等という諸属性によって限定されたブラフマンの明知 (vedana) を示した上で、

「さて、この世において、アートマンとこれらの真実なる欲望とを悟らずに [この世を] 去る者達は、すべての世界の中で欲するままに行動することはない。」(Chā. Up. VIII. 1. 6)

という [記述によって]、[ブラフマンの] 明知がないこと (avedana) の非難を行いながら、諸属性によって限定された [ブラフマンの] 明知に対する熱意を示している。同様に、ヴァーージャサネーヤ派においては、

「万物の支配者であり、万物の君主である。……彼は万物の自在主である。彼は諸存在の王である。彼は諸存在の守護者である。」(Br. Up. IV. 4. 22)

という [記述によって] 何度も何度も [ブラフマンの] 自在主性 (aiśvarya) が教示さ

れており、それによって [ブラフマンの] 諸属性に対する熱意が理解される。他 [の聖典] においても同様である。

また、千人の母や父よりも愛情にあふれる聖典が、詐欺師の如く、最高真理に属するものではなく (apāramārthika)、[最高真理においては] 否定されるべきものであり、[聖典以外の] 他の認識手段によっては認識できない [ブラフマンの] 諸属性を熱意をもって教示した後に、[一転して、] 輪廻の円環の回転によって既に [その中を] さまよいつながりながら解脱を希求している者達を、さらにさまよわせることはできない。

一方、

「この中に多様性 (nānā) はまったくない。」 (Br. Up. IV. 4. 19)

「[ブラフマンは] 唯一のものとしてのみ認められるべきものである。」 (Br. Up. IV. 4. 20)

という [記述] は、万物はブラフマンの結果であるが故に、それ (ブラフマン) を本質 (ātman) として有しており、それ故に、[ブラフマンのみが] 唯一のものだという認識を生じさせる。その上で、[万物は] ブラフマンを本質として有していないから多様性があるという、以前に確立されていた [誤った] 認識 (darśana) を否定する。[ただし] この事柄は、既に詳述されたことである⁸⁾。

また、

「彼、すなわちこのアートマンは「そうではない、そうではない」[と説かれている]。』 (Br. Up. IV. 4. 22)

というこ [の記述] では、「そう (iti)」という語によって、[聖典以外の] 他の認識手段によって認識される現象世界 (prapañca) の形態 (ākāra) が指摘された上で、「ブラフマンはそのようなものではない」ということ、すなわち、万物の本質であるブラフマンは現象世界とは異なる特質を持つものであることが説かれている。そして、まさにそのことを、『プリハッド・アールニヤカ・ウパニシャッド』は先の記述の] 直後で [次のように] 教示している。

「[彼は] 不可捉の者である。なぜならば、彼は捉えられないからである。[彼は] 不壊なる者である。なぜならば、彼は壊されないからである。[彼は] 無執着なる者である。なぜならば、彼は執着されないからである⁹⁾。[彼は] 苦しみなき者で、苦しめられることなく、傷つけられることはない。」 (Br. Up. IV. 4. 22)

[ブラフマンは、聖典以外の] 他の認識手段によって捉えられ得るものとは異なるものであるから、[聖典以外の] 他の認識手段によっては捉えられない。[ブラフマンは] 壊され得るものとは異なるものであるから、壊されない。同じように、[聖典の] 後の部分 [で示されているブラフマンの諸属性も] 瞑想されるべきである。『チャーンドーギヤ [・ウパニシャッド]』においても、

「これ (身体) の老衰によって、それが老衰することはない。これ (身体) の死に

よって、[それが] 殺されることはない。この実在なるもの (satya) が、ブラフマンという城郭である。この中に、諸々の欲望が含まれている。」(Chā. Up. VIII. 1. 5) という [記述によって]、ブラフマンはすべてのものとは異なるものであることが示された上で、その中に、「欲望が実現すること」等 [の諸属性が含まれていること] が規定されるのである。//39//

〈452〉 [不二一元論学派が改めて論ずる。]

【論者】 たとえそうだとしても、

「この世において、アートマンとこれらの真実なる欲望とを悟った上で [この世を] 去る者達は、すべての世界の中で欲するままに行動する。もし彼が父祖達の世界 [に到達すること] を欲するのであれば、」(Chā. Up. VIII. 1. 6-VIII. 2. 1) という [一節] から始まる [記述] によって、「欲望が実現すること」等の諸属性によって限定された [ブラフマンの] 明知 (vedana) に関しては、輪廻における果報との結び付きが説かれている。それ故、解脱を希求し、ブラフマンへの到達を望む者にとって、有属性 (saguna) のブラフマンは念想されるべき対象ではない。しかも、高次のヴィディヤーの果報は、

「最高の光明に到達した後に、自らの姿 (rūpa) で顕現する。」(Chā. Up. VIII. 12. 3) という、このことに他ならない¹⁰⁾。したがって、ブラフマンへの到達を望む者にとって、「欲望が実現すること」等 [という諸属性] は、[解脱を目的とする明知において念想されるべき対象に] 統合されるべきものではない。

さて、[この反論に対して、スートラが] 答論を示す。

upasthite'tas tadvacanāt //40//

[個我はブラフマンに] 近づいた時に、それ故に、[すべての世界の中で欲するままに行動する]。そのことが [聖典に] 説かれているが故に。

【答論】 upasthiti とは upasthāna (近づくこと)、すなわち、ブラフマンに到達することである。「近づいた時に (upasthite)」、すなわち、個我 (pratyagātman) がブラフマンに到達し、すべての束縛から解放され、自らの姿 (rūpa) で顕現した時に、「それ故に (ata)」こそ、すなわち、[ブラフマンに] 到達したという理由の故にこそ¹¹⁾、[個我は] すべての世界の中で欲するままに行動することが [次のように] 述べられているのである。

「最高の光明に到達した後に、自らの姿で顕現する。彼は最上のプルシャである。彼は、そこで食べたり、遊んだり、女達や乗り物や親類達と戯れたりしながら歩き回るけれども、付属物であるこの身体を思い出すことはない。」(Chā. Up. VIII. 12.

3)

「彼は自らの主人となり、すべての世界の中で欲するままに行動する。」(Chā. Up. VII. 25. 2)

それと同じことは、『ブラフマ・ストトラ』第 IV [篇] において¹²⁾、より詳細に示されるであろう。したがって、すべての世界の中で欲するままに行動することは、解脱した者によって享受されるべき果報である。故に、解脱を希求する者にとって、「欲望が実現すること」等の〔ブラフマンの〕諸属性は、〔解脱を目的とする明知において念想されるべき対象に〕統合されるべきものである。//40//

第17節

tannirdhāraṇānyamas taddṛṣṭeh pṛthagdhyapratibandhaḥ phalam //41//

〔諸々の祭式において〕それ(ウドゥギータ等)の定置(瞑想)は必須ではない。それが説かれているが故に。なぜならば、〔ウドゥギータの念想等には、祭式に〕妨害がないことという果報が別にあるが故に¹³⁾。

〈453〉【論者】

「オーム(om)というこの聖音(akṣara)を、ウドゥギータ(udgītha)として念想すべきである。」(Chā. Up. I. 1. 1)¹⁴⁾

から始まる〔一節に説かれている〕諸々の念想は、祭式の支分(karmāṅga)〔であるウドゥギータ等〕を抛り所としており、それらは祭式の支分であるウドゥギータ等〔が念想される対象であること〕によって、祭式の支分として実践されることが定着している。〔それは〕あたかも、〔祭式で用いられるジュファー(柄杓)に関して、祭式の支分である〕ジュファー〔はパルナ樹製であることが規定されていること〕によって、〔ジュファーが〕パルナ樹製であること等〔は祭式の支分であること〕と同様である¹⁵⁾。それ故、ウドゥギータ等の念想と結び付いた〔果報〕は¹⁶⁾、必ず祭式の中に統合されるべきである(固有の果報を生み出すわけではない)。〔なぜならば、〕

「明知(vidyā)と信仰(śraddhā)と秘儀(upaniṣad)とによって行われる〔祭式〕こそが、より効果的である。」(Chā. Up. I. 1. 10)

という現在形による提示が別の果報〔を規定している〕と想定することは不適切だからである。〔それは〕あたかも、パルナ樹製〔の柄杓〕等と結び付いている、悪しき評判を聞かないこと〔という果報は積義にすぎず、そのような果報が実際に生じるわけではないこと〕と同様である。

このように〔論者によって〕論じられたのに対して、我々が答える。

【答論】「その定置は必須ではない。」「定置 (nirdhāraṇa)」とは、しっかりと意 (manas) を安定させること、すなわち、瞑想 (dhyāna) という意味である。「その定置は必須ではない」、すなわち、諸々の祭式において、ウドゥギータ等の念想は必須ではない。なぜか。「それが説かれているが故に。」なぜならば、[ウドゥギータ等の] 念想の実践は必須ではないことが知られるからである。すなわち、

「これをこのように瞑想する者も瞑想しない者も、両者はそれ (聖音オームを唱えること) によって [祭式を] 行う。」(Chā. Up. I. 1. 10)

という [記述の中で]、瞑想を行わない者も [祭式を] 実践することが述べられているからである。また、もしも [ウドゥギータ等の念想が祭式の] 支分であるならば、念想の実践が必須でないことは適切ではない。[だが、] このように念想が [祭式の] 支分でないことと確定されるならば、念想についての規定文 (vidhi) には果報に対する期待が込められている。その場合、ラートリ・サトラ祭の理論 (rātrisatra-nyāya) によって¹⁷⁾、[ウドゥギータ等の念想の果報は、祭式が] より効果的になること (vīryavattaratva) という、祭式 [自体] の果報とはまったく別の果報であると理解される。

この「より効果的になること」とは何か。[それは] 祭式の果報 [の発現] そのものに、「妨害がないこと (apratibandha)」である。なぜならば、祭式の果報 [の発現] は、より強力な他の祭式の果報によって、それが継続している限り妨害されるからである。そ [の妨害] がないことが、「妨害がないこと」である。事実、その「妨害がないこと」は、天界への再生 (svarga) 等を特徴とする祭式 [自体] の果報とはまったく別の果報である。それ故、このことが、「なぜならば、妨害がないことという果報が別にあるが故に」と [スートラの中で] 述べられている。

したがって、たとえ [ウドゥギータ等の念想が] 祭式の支分を抛り所としているとしても、[それには祭式自体の果報とは] 別の果報がある。故に、搾乳壺 (godohana) 等と同様に¹⁸⁾、諸々の祭式の中でウドゥギータ等の念想は必須ではないと結論づけられるのである。//41//

第18節

pradānavad eva taduktam //42//

[最高アートマンは本質によって瞑想された後にも、諸属性によって限定されたものとして繰り返し瞑想されるべきである。それは] 供物 [が繰り返し捧げられること] とまさに同様である。そのことは [『サンカルシャナ (Saṃkarṣaṇa)』 篇で] 述べられている¹⁹⁾。

〈454〉ダハラ・ヴィディヤーに関して、

「この世において、アートマンとこれらの真実なる欲望 (satyān kāmān) とを悟った

上で「[この世を] 去る者達は、」(Chā. Up. VIII. 1. 6) という「一節」では、微細な虚空 (daharākāśa)、すなわち最高アートマンの念想が述べられた上で、「これらの真実なる欲望とを」という「記述」によって、「最高アートマンの」諸属性に対する念想も別に規定されている。

それに関して「次のような」疑問が「生ずる」。

【問】諸属性を思念 (cintana) している間にも、それぞれの諸属性によって限定されたものとしての「微細なもの」、すなわち「最高」アートマンの思念は繰り返し行われるべきか否か。

【論者】微細な虚空 (最高アートマン) のみが「悪から離れていること」等の諸属性を有する者 (gunin) である。しかも、彼は「諸属性の念想と」まったく同時に瞑想されることが可能である²⁰⁾。故に、諸属性「の念想」のために、彼 (最高アートマン) の思念が繰り返し行われる必要はない。

このように「論者によって」論じられたのに対して、「我々が」答える。

【答論】「供物とまさに同様である。」すなわち、供物と同様に、必ず繰り返し行われるべきだという意味である。たとえ微細な虚空 (最高アートマン) のみが「悪から離れていること」等の諸属性を有する者であり、彼がまず始めに思念されるとしても、諸属性によって限定された形態 (ākāra) は、「最高アートマンの」本質そのもの (svarūpamātra) とは異なっている。また、

「悪から離れており、不老であり、」(Chā. Up. VIII. 1. 5) から始まる「記述」によって、「最高アートマンは」諸属性によって限定されたものとして念想されるべき対象であると規定されている。それ故、始めに本質 (svarūpa) によって考究された「最高アートマン」が、「改めて」「悪から離れていること」等「の諸属性」によって限定されたものとして考究されるために、「最高アートマンの瞑想は」繰り返し行われるべきである²¹⁾。例えば、

「王インドラに対して、君主インドラに対して、自らの王インドラに対して、11枚の皿に盛られた祭餅 (puroḍāśa) を捧げるべし。」(Tai. Saṃ. II. 3. 6) という「記述の中で」、たとえインドラのみが王であること等の諸属性によって限定されているとしても、それぞれの属性と結び付いた形態 (ākāra) は「相互に」異なっているため、供物は繰り返し「捧げ」られている²²⁾。「そのことは」『サンカルシャナ (Saṃkarṣaṇa)』篇で「次のように」「述べられている」。

「実に、[供物を捧げられる] 神格は多様である。[それぞれの神格には] 個別性があるが故に。」(Saṃkarṣaṇa Kāṇḍa II. 2, Adhikaraṇa 15)²³⁾

//42//

第19節

liṅgabhūyastvāt taddhi balīyas tad api //43//

『ナーラーナヤ章』はすべてのパラ・ヴィディヤーで念想されるべき対象の特徴を決定するためのものである。] 標徴が多数あるが故に。なぜならば、それ(標徴)は[主題よりも] 強力であるが故に。そのことはまた、『初篇』において述べられている]²⁴⁾。

<455> タイッティリーヤ派 [の聖典] において、ダハラ・ヴィディヤー [が説かれた] 直後に [次のように] 説かれている。

「[彼は] 千の頭を持つ神であり、一切を見る者、一切の幸福をもたらす者、一切なる者、ナーラーヤナ神、不滅なる者、最高なる君主である。」(Ma. Nā. Up. XI. 1)²⁵⁾ から始まり、

「彼は不滅なる者、最高者、自らの王である。」(Ma. Nā. Up. XI. 13) で終わる [一節] である。

それに関して [次のような] 疑問が [生ずる]。

【問】先に述べられた²⁶⁾[ダハラ・] ヴィディヤーと同一のヴィディヤーとして、そ [のヴィディヤーで] 念想されるべき対象の特徴が、こ [の一節] で決定されるのか、それとも、すべてのウパニシャッドで説かれているパラ・ヴィディヤー (para-vidyā, 最高アートマンの瞑想) で念想されるべき対象の特徴が決定されるのか。いずれが適切であるのか。

【論者】ダハラ・ヴィディヤーで念想されるべき対象の特徴が決定される。なぜか。主題の故に。なぜならば、[同じウパニシャッドの] 前の章において、ダハラ・ヴィディヤーが [次のように] 述べられているからである。

「微細にして (dahara)、悪から離れており (vipāpa)、最高者の家である白蓮華 (心臓) が城郭 (身体) の真ん中に位置している。

さらに、そこには憂いを離れた微細な空間がある。その中に存する者が念想されるべきである。」(Ma. Nā. Up. X. 7)

また、この章においても、

「また、下を向いた心臓は、蓮のつぼみのようである。」(Ma. Nā. Up. XI. 7)

から始まる [記述] によって、心臓という白蓮華について語られており、それは、この『ナーラーナヤ章』が、ダハラ・ヴィディヤーで念想されるべき対象の特徴を決定するためのものであることを明示している。

このように [論者によって] 論じられたのに対して、我々が答える。

【答論】「標徴が多数あるが故に。」すなわち、こ [の『ナーラーナヤ章』] は、あらゆるパラ・ヴィディヤー（最高アートマンの瞑想）で念想されるべき対象の特徴を決定するためのものである。それ故に、多数の標徴 (liṅga) が示されている。すなわち、[この箇所において] 「不滅なる者」「吉祥なる者」「幸福なる者」「最高ブラフマン」「最高の光明」「最高の真理」「最高アートマン」等の語で表されているものが、パラ・ヴィディヤーで念想されるべき対象である。ここでは、[その対象が、] まさにそれらの語で示された後に、それがナーラーヤナ神であると規定されているのである。すなわち、多数のヴィディヤーに関して説かれたことが [繰り返し] 示された後に、ナーラーヤナ神としての標徴は多数あること、つまり、ナーラーヤナ神のみが、すべての明知で念想されるべき対象であり、「粗大でないこと (asthūlatva)」等によって限定された歓喜等の諸属性を有する最高ブラフマンであるという特徴を確定するために、「多数の (bhūyas)」すなわち、数多くの (bahutara) 標徴が存在するのである²⁷⁾。こ [のストトラ] における「標徴 (liṅga)」という語は、「象徴 (cihna)」と同じ意味である。[したがって、] 象徴 [を表す] 言葉が数多く存在するという意味である。事実、それ (標徴) は主題 (prakaraṇa) よりも強力である。「そのことはまた」、『初篇 (Prathama Kāṇḍa)』において [次のように] 述べられている。

「聖句 (śruti)、標徴 (liṅga)、文章 (vākya)、主題 (prakaraṇa)、連続 (sthāna)、指名 (samākhyāna) が同時に用いられている場合、後のものほど力が弱い。意味から遠ざかっているが故に。」 (MS III. 3. 14)

【論者】だが、[先に次のように] 述べられた。すなわち、

「蓮のつばみのようなものである。」 (Ma. Nā. Up. XI. 7)

から始まる記述は、こ [の『ナーラーナヤ章』] はダハラ・ヴィディヤーに関する補遺 (śeṣa) であることを明示している。

【答論】そうではない。なぜならば、より強力な認識手段 (標徴) によって、[『ナーラーナヤ章』] は] すべてのヴィディヤーで念想されるべき対象の特徴を決定することを目的としていることが確定された場合、ダハラ・ヴィディヤーに関しても、そのナーラーヤナ神のみが念想されるべき対象である。それ故に、その記述 [がすべてのヴィ

ディヤーで念想されるべき対象の特徴を決定していること]は適切である。

また、

「千の頭を持つ神」(Ma. Nā. Up. XI. 1)

等 [という記述] は第二格 (目的格) で示されているので、[これらの記述は] 前の章で説かれた *upa-√ās* [という動詞] と結び付くという疑問を抱くべきではない。

「その中に存する者が念想されるべきである。」(Ma. Nā. Up. X. 7)

という [記述] においては、*upa-√ās* と結び付いた *krt* 接辞 (-*tavya*) によって、念想されるべき対象の、[念想されるという] 行為が示されている。故に、[前の章 (Ma. Nā. Up. X) の記述の中で] その念想されるべき対象に対して第二格 [が用いられること] は不適切だからである。また、

「このプルシャは、まさに一切なる者である。」(Ma. Nā. Up. XI. 2)

「ナーラーヤナ神は最高の実在である。」(Ma. Nā. Up. XI. 4)

等 [の記述] においては第一格 (主格) で示されている。故に、[これらの記述において用いられている] 第二格は第一格の意味で理解されるべきである。また、

「ナーラーヤナ神は、内部でも外部でも、そのすべてに遍満して存在する。」(Ma. Nā. Up. XI. 6)

「最高アートマンはその火炎の真ん中に安住している。彼はブラフマー神であり、彼はシヴァ神であり、彼はインドラ神である。彼は不滅なる者、最高なる者、自らの王である。」(Ma. Nā. Up. XI. 13)

という表現によって、すべてのものよりも優れたナーラーヤナ神のみが、すべて [のヴィディヤー] において念想されるべき対象であることが確定されている。故に、第二格は第一格の意味で [用いられている] ことが決定されるのである。//43//

註

本稿は、拙稿「ラーマヌジャの瞑想論(1)」(『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社, 2014, pp. 247-259)、「同(2)」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』29, 2014, pp. 312-301)、「同(3)」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』31, 2016, pp. 264-252)、「同(4)」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』32, 2017, pp. 226-212)、「同(5)」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』33, 2018, pp. 146-132)、「同(6)」(『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』34, 2019, pp. 170-158)の続編である。和訳に際しての底本と参考書、ならびに、註で使用する略号と文献は上掲拙稿を参照されたい。

- 1) この *sūtra* の字句の解釈に関して、Śaṅkara と Rāmānuja の見解は一致している。すなわち、Śaṅkara も、Chā. Up. VIII. 1. 1-6 と Br. Up. IV. 4. 22 で説かれている *Brahman* は、いずれも心臓を抛り所とするものであり、その内容は相互に適用され得ることがこの *sūtra* では示されていると解釈している。ただし彼は、Chā. Up. VIII. 1. 1-6 に示された *Brahman* は有属性 (*saguna*) であり、その念想は世俗 (*vyavahāra*) の立場に属するものであるのに対して、Br. Up. IV. 4. 22 に示された *Brahman* は無属性 (*nirguṇa*) であり、その念想は最高真理

- (paramārtha) の立場に属するものである。それ故、両者に示された念想は同一のものではないと論じている。Śāṅkara のこの見解を、Rāmānuja はこの sūtra に対する注釈の末尾で要約しており、それに対する批判を BS III. 3. 39-40 に対する注釈で展開している。
- 2) 八つの属性 (guṇāṣṭaka) とは、Chā. Up. VIII. 1. 5 に説かれているものであり、悪から離れていること (apahatapāpmatva)、不老 (vijaratva)、不死 (vimṛtyutva)、憂いなきこと (viṣokatva)、飢餓なきこと (vijighatsatva)、渇きなきこと (apipāsatva)、欲望が実現すること (satyakāmatva)、意図が実現すること (satyasamkalpatva) である。
 - 3) ŚP ad ŚBh III. 3. 38 (vol. 2 p. 508 l. 9) は、この「等 (ādi)」という語によって、Chā. Up. VIII. 1. 1 に説かれている「微細性 (daharatva)」とは正反対に、Br. Up. IV. 4. 22 で説かれている「偉大性 (mahatva)」が示されていると解説している。
 - 4) Śāṅkara によれば、最高真理の立場における Brahman は無属性の存在であり、Brahman が有属性として認識されるのは、あくまで世俗の立場にもとづく場合である。その見解にしたがって、彼は本稿註 1 で示したように、Br. Up. IV. 4. 22 で説かれている Brahman は最高真理の立場によるものであること、及び、解脱を目的とする念想 (明知) においては、Brahman のいかなる属性も対象とされるべきではないと考えているのである。
 - 5) 底本に「微細であること (anṛtva)」は記されていない。G 本と U 本によって補った。
 - 6) Rāmānuja は、この sūtra と次の sūtra を Śāṅkara 学派に対する反論とみなしているのに対して、Śāṅkara と Bhāskara はこの sūtra と次の sūtra で 1 つの節とみなしており、そこでは Vaiśvānara-vidyā との関わりの中で、Chā. Up. V. 19-24 で示されている食物を 5 つの生気に供えるという Prāṇa-agnihotra が、断食中にも実践されるべきか、それとも中断されるべきかという問題が論じられていると注解している。ちなみに両者とも、この sūtra は「中断しない。[Agnihotra への] 熱意の故に」という反論者の見解を示しており、次の sūtra は「[食物の準備が] なされた時、そ [の準備された食物] によって [Agnihotra はなされるべきである]。そのことが [聖典に] 説かれているが故に」という定説が示されていると解釈している。反論者によれば、断食中は水等を代用の供物として用いればよいというのに対して、定説者は、代用の供物を用いることはあり得ず、それ故に、Prāṇa-agnihotra は断食中には中断されるべきだと主張しているという解釈である。
 - 7) 底本では 'vijidhatso、G 本では 'vijighatso と記されているが、U 本と Chā. Up. の底本によって vijighatso と改めた。
 - 8) R 訳 (vol. 3 p. 305) によれば、これは ŚBh ad BS I. 1. 1 (§. 51, part 1, p. 97 l. 10-p. 98 l. 7) の議論を指すと思われる。
 - 9) 底本では sajate と記されているが、U 本と G 本、及び Br. Up. の底本によって sajyate と改めた。
 - 10) ŚP ad ŚBh III. 3. 39 (vol. 2 p. 510 ll. 11-12) はここでの Advaita 派の主張について、「すべての世界の中で欲するままに行動すること」等は輪廻における果報である。「自らの姿で顕現すること」は直接的に解脱の果報になる。その違いが説かれている」と解説している。
 - 11) ŚP ad ŚBh III. 3. 40 (vol. 2 p. 511 l. 1) は、これを「[Brahman に] 到達した直後に (anatarām)」と解説している。
 - 12) 具体的には BS IV. 4. 7-8 である。
 - 13) この sūtra に対して、Śāṅkara、Bhāskara、Rāmānuja はほぼ一致した解釈を示している。なお、Śāṅkara はこの sūtra における問題を、祭式における Udgītha-vidyā は、あたかもジュファー (護摩を行うための柄杓) がパルナ樹製であるのと同様に必須である (nitya) か、それとも、搾乳壺の使用が任意であるのと同様に必須ではない (anitya) かということだと述べている。

ジュフー（柄杓）については本稿註15と註16を、搾乳壺については本稿註18を参照。

- 14) Chā. Up. で説かれている Udgītha-vidyā については、ŚBh ad BS III. 3. 6-9で詳述されている。Chā. Up. I. 1. 1と Udgītha については、拙稿「ラーマーヌジャの瞑想論(2)」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』29 (2014) p. 303 n. 9を参照。
- 15) この箇所の内容を、ŚP ad ŚBh III. 3. 41 (vol. 2 p. 513 ll. 10-13) は次のように注解している。

「祭式の解説書を考察すると、「ジュフー (juhū, 柄杓) によって護摩を行う (juhvā juhōti)」という記述の中で、ジュフー（柄杓）が護摩の手段として規定されている。他の解説書を考察しても、「パルナ (parṇa) 樹製のジュフー（柄杓）を用いる者は (yasya parṇamayī juhūr bhavati)」(Tai. Saṃ III. 5. 7. 2) という記述が、ジュフーに言及した後に、それ（ジュフー）はパルナ樹製であることを規定している。それ故、ジュフーによって、パルナ樹製であることは〔護摩の〕支分である。それと同様に、他の解説書で規定されている念想も、ウドゥギータによって、祭式の支分であるという意味である。」

なお、ジュフーは祭火の中にギーを注ぐための木製の柄杓である。また、[針貝 1990: 464 n. 158] によれば、「Tai. Saṃ には ‘juhvā juhōti’ という文は存在せず、また Śrautasūtra の関連箇所にも見いだせない」とのことである。

- 16) 論者によるこの箇所以下の記述について、ŚP ad ŚBh III. 3. 41 (vol. 2 p. 513 ll. 15-18) は次のように注解している。

「[Udgītha の] 念想が固有の果報 [を生み出す] 手段であるならば、[その念想が祭式の] 支分であることは不適切である。……また、果報がないこと (aphala) が、支分としての実践であると認められているという意味である。[Udgītha の念想は] 固有の果報 [を生み出す] 手段であるということが説かれているのかという疑問に関して、「悪しき評判を聞かない」という [一文は、ジュフーが] パルナ樹 [製] であること [を賞讃する] 積義 (arthavāda) であると同様に、これも積義である。そのことを、[ŚBh III. 3. 41における] 「ウドゥギータ等の念想と結び付いた [果報] は」から始まる [一節] は述べている。」

この一節でその一部が引用されている「パルナ樹製のジュフーを用いる者は、[自らに対する] 悪しき評判を聞かない (yasya parṇamayī juhūr bhavati, na sa pāpam ślokaṃ śṛṇōti)」(Tai. Saṃ III. 5. 7. 2) という一文に対して、MS IV. 3. 1-3では、それをジュフーがパルナ樹製であることを賞讃する積義 (arthavādha) であり、ジュフーがパルナ樹製であることで、必ず「悪しき評判を聞かない」という果報が生じるわけではないと論じている。以上については [Sandal 1923(1980): 226-227]、R 訳 (vol. 3 p. 308 n. 1) 及び [針貝 1990: 449 n. 95] を参考にした。

- 17) Rātrisatra-nyāya は MS IV. 3. 15-16に対する例外規定として、MS IV. 3. 17-19に示されている。すなわち、MS IV. 3. 15-16では、規定文 (vidhi) と積義 (arthavāda) の中に果報が示されていない場合には、天界への再生 (svarga) が果報として想定されることが示されているのに対して、MS IV. 3. 17-19では、たとえ規定文の中に果報が示されていなくても、積義の中に果報が示されていれば、それが果報として認められることが示されている。以上、[針貝 1990: 461 n. 147] を参考にした。なお、ŚBh III. 3. 41において rātrisatra-nyāya が言及された目的は、Udgītha-vidyā の規定文である Chā. Up. I. 1. 1-6にその果報が示されていないため、積義である Chā. Up. I. 1. 10に示されている「祭式がより効果的になること」が、この vidyā の果報であると理解され得ることを示すことである。これについては R 訳 (vol. 3 p. 309 n. 1) を参考にした。

- 18) 新満月祭の際に、通常は水を取手付きの柁 (camasa) で運ぶのに対して、祭主が家畜を得ることを望む場合には、搾乳壺 (godohana) で水を運ぶべきことが *Āpastambha Śrautasūtra* I. 16. 3 に示されている。この場合、柁で水を運ぶことは祭式の支分であるため、「祭式 [の成就] のためのもの (kratvartha)」であるのに対して、搾乳壺で運ぶことは祭式の支分ではないため、「人間 [の幸せ] のためのもの (puruṣārtha)」であり、したがって、新満月際における必須の事柄ではない。「祭式のためのもの」と「人間のためのもの」の区別は MS IV. 1. 2 に示されている。以上、ŚP ad ŚBh III. 3. 41 (vol. 2 p. 514 ll. 2-3)、R 訳 (vol. 3 p. 310 n. 1)、[吉水 2016: 240] を参考にした。なお、ŚBh III. 3. 41 において搾乳壺の例が言及された目的は、Udgītha の念想も、新満月際における搾乳壺の使用と同様に、祭式の支分ではないため必須ではないけれども、祭式に「妨害がないこと」という果報を期待することで、祭式が「より効果的になること」を望む場合にのみ、それは行われればよいことを示すことである。
- 19) この sūtra に対する Śaṅkara と Bhāskara の問題設定は、Br. Up. I. 5. 21-22 と Chā. Up. IV. 3 において、ātman に関しては生氣 (prāṇa) が最も優れた者、もしくは摂取者 (samvarga) であると説かれており、諸神格に関しては風 (vāyu) が最も優れた者、もしくは摂取者であると説かれているけれども、そこに説かれている生氣と風は別のものか否かというものである。それに対する定説は、両者の本性 (tattva) に区別はないけれども、両者の状態 (avasthā) は異なっており、それ故に、両者を対象とする瞑想 (ādhyāna) には区別がある。故に、両者は別々のものであるという見解である。したがって、ここでの議論の内容は、Rāmānuja のそれとはまったく異なるものである。ただし、sūtra の字句の解釈とそれが示す聖典については、Śaṅkara、Bhāskara、Rāmānuja とともに共通している。
- 20) ŚP ad ŚBh III. 3. 42 (vol. 2 p. 514 ll. 11-13) は、「属性を有する者 (guṇin) の思念 (cintana)」とは「歓喜性等によって限定された本質 (svarūpa) の思念」であり、「属性 (guṇa) の思念」とは「八つの属性の思念」であると述べた上で、ここでの論者の見解は、「本質の思念の対象 (svarūpacintanārtha) と、属性の思念の対象 (guṇacintanārtha) は、同時に瞑想 (anusam-vdhā) することが可能であるという意味である」と説明している。
- 21) この点については拙著『ラーマヌジャの救済思想』(山喜房佛書林、2014) 第 5 章第 1 節を参照されたい。
- 22) R 訳 (vol. 3 p. 311 n. 1) はこの引用文の趣旨を、Traidhātavyeṣṭi という祭式において、Indra は rāja, adhirāja, svarāja という 3 通りの呼び名で呼ばれている。これらの異なる呼びかけは、3 つの異なる姿をとる Indra 神が、3 つの異なる神格として扱われ、それ故に、別々の捧げ物を提供されるべきであることを正当化させるものだとして説明している。つまり、念想されるべき対象が同一の最高 ātman だとしても、念想されるべき対象の形態が異なれば、別途、繰り返し念想されるべきことがここでは示されているというのである。ちなみに、この引用文に対する Ś. BSBh III. 3. 43 (p. 755. l. 12 – p. 756 l. 2) の解説は次のとおりである。
- 「この Tripuroḍāṣinī という供儀 (iṣṭa) において、…… [供え物の受者が] Indra であることに区別はないから、[3 つの祭餅を] 一緒に供えるのかという疑問 [が生じる]。それに対して、[たとえ Indra は 1 人だとしても、そこで語られている] 王等という属性には区別があるから、……まさに [聖典に] 記されているとおりに、神格は別々である。故に、[祭餅を] 供えるのも別々だということになる。」
- 23) 原典は筆者未見。R 訳 (vol. 3 p. 311) による。なお、*Samkarṣaṇa Kāṇḍa* については [中村 1951: 35-39] を参照。
- 24) この sūtra を Śaṅkara と Bhāskara は次の節に含めており、Śa. Br. X に説かれている「火の

- 秘儀 (agnirahasya)」に関する規定とみなしている。その上で、この sūtra は、「manas によって構築された空想上の火は、祭式の支分ではなくて、独立した瞑想の対象である」という定説を説いていると解説している。ただし、sūtra の字句の解釈とそれが示す聖典については、Śaṅkara、Bhāskara、Rāmānuja とともに共通している。
- 25) [山田 1923(1980): 41 n. 1] はこの一節に対して、「千頭・千眼・千足は *Rg Veda* X. 90. 1 にて歌へる、所謂原人(《Puruṣa》)の歌に出づ、この句原人の歌より出でたるものなるべし」と評している。
- 26) 具体的には BS III. 3. 38–40, 42 である。
- 27) Rāmānuja がこの sūtra に与えた意味づけについては、拙著『ラーマヌジャの救済思想』(山喜房佛書林、2014) pp. 445–447 を参照されたい。

略号と文献補遺

2、『シュリー・パーシュヤ』以外のテキスト

Āpastambha Śrautasūtras: The Śrauta Sūtra of Āpastambha: Belonging to the Taittirīya Saṃhitā with the Commentary of Rudradatta. Vol. II, Ed by Richard Garbe, Calcutta: The Asiatic Society, 1885.

3、その他の参考文献

Sandal, Mohan Lal 1923(1980), 1925(1980) *Mīmāṃsā Sūtras of Jaimini.* 2 vols., (reprint, Delhi: Motilal Banarsidass).

針貝邦生 1990 『古典インド聖典解釈学研究—ミーマーンサー学派の積義・マントラ論—』九州大学出版会。

山田龍城 1923(1980) 「マハー・ナーラーヤナ・ウパニシャット [四五] 《大那羅延天の奥義》」『ウパニシャット全書 五』 pp. 1–92, (復刻、東方出版)。

吉水清孝 2016 「*Brahmasutra* 成立史の再検討—第3巻第3章について—」『論集 (印度学宗教学会)』 43, pp. 246–232.